

# 新見産材を活用したオンライン「新見の音」づくりでの世代間交流ができた

## 一般社団法人にみ木のおもちゃの会

### 活動の目的

「新見の音をみつけよう」というテーマを設定した。新見産材にこだわり、活用するという単純だが創造性の高い活動に若い世代を参加、参画させたいという思いがあった。木の楽器や音の出るおもちゃづくりの製作過程の中で、自分を表現することができ、音楽の楽しさを体感できる。また、年齢差を越えた交流のツールとして、「木」から生まれる優しい手触り感とやさしい音を感じることが、情緒の安定にもつながっていく。個の楽しみから世代間を通じての音楽を通しての交流が、地域での人と人との結びつきを強くしていく。

森林はどうあるべきか、どう活用すべきかを今一度考え、子どもたちから大人まですべての人が、知恵を絞り、助け合い、身近な所から少しでも未来の森林づくり、サステナブルな社会へ向けて関わっていく必要性を感じ取ってほしい。「木育」の一環としての「新見の音」づくりは、子どもの頃から木を取り入れた生活の中で、木と森に親しみ、人と、木や森のかかわり、森林づくりの大切さを考えられる豊かな心を育むことを目的としている。

### 活動の内容及び経過

西粟倉村で、地元材を活用しての地域共生を目指した活動を展開している「mori-no-oto」の石川照男氏を講師として招聘し、新見産材による音づくりに取り組んだ。新見高校の生徒との地元ひのき材を使用しての「カホン」という楽器作りは、岡山県教育委員会の高校生発！「木のぬくもり実感」事業と連携することができた。当会の「木育活動プログラム」では、今まで高校生を対象とした取り組みはなく、初の幼、小、中、高、大学を貫く活動と交流の企画であった。しかし、コロナ禍により、一般の方を含め広く参加者を集めることができなかった。

9月の新見公立大学の公開講座での「木育」研修会が機会となり、大学との共同事業との連携が可能となった。現状を分析し、新見公立大学健康保育科10名と市内2保育所とのオンライン交流に計画を変更した。保育所での「木の楽器作り」と大学生の「交流プログラム作り」を同時進行で進めていった。大学や2園の教職員との連携により、初の試みであったオンラインでの音楽交流を計画通り実施することができた。

### 活動の成果・効果

新見高校生との「カホン」づくりを通して、「木」を加工する技術を学び、自分たちが製作した楽器が、人と人の交流のツールとして活用されていくことの喜びを感じることができた。「木」と関わる機会の少ない高校生への実践に即した木工技



術のスキルアップ授業では、保育園児との交流に活かしていこうとする思いが重なり、確かな学びの場となった。

草間台保育所、新見南認定こども園と新見公立大学健康保育科10名とのオンライン交流が実現した。コロナ禍で、入学してから教育実習等の直接保育園児たちとの交流の機会を失っていた学生たちにとって、保育プログラムも含め、園児を対象とした自らの企画を具体的に実践していく場ができたことの意義は大きい。園児、大学生、そこに関わったスタッフも確かな手応えと充足感を味わうことができた。園児と大学生との交流の様子は、ケーブルテレビをはじめ、マスコミ等で報道され、地域の中での新見公立大学の存在感を示すことにも繋がった。「木育」の成果として、北浦菜緒さんのグラレコと共に広く発信していきたい。

### 今後の課題と問題点

コロナ禍という想定外の事象の中で、事業実施内容の変更を余儀なくされた。最終的に、オンライン交流に結びついたが、もう少し早い段階でのオンラインでの取り組みもできたかに思う。幅広い年代層への広がりを進めるためには、計画的、継続的な取り組みが不可欠である。目的へのアプローチについては、会員同士での深い協議を基本としながらも、より広い分野の団体との連携、情報の共有を積極的に図っていきたい。

「木育」とは、子どもの頃から木を取り入れた生活の中で、木と森に親しみ、人と、木や森のかかわり、森林づくりの大切さを考えられる豊かな心を育む活動である。「新見の木に触れ、新見の音をみつけよう」というテーマは、ごく身近なところにある「木」にスポットを当てての活動だった。新見公立大学との連携は、当初、具体的な連携の形はなかった。年度当初、大学を核とした「木育」体制の共通理解を深めておくことの必要性を感じている。

- 代表者：藤本忠男 ●所在地：新見市新見
- TEL：0867-72-4892 ●E-MAIL：fu-yo-ma-se@mx32.tiki.ne.jp
- 設立年：2017年 ●メンバー数：34名